

鴻外選集八

張江拙齋

鷗外選集 8

遡江抽齋

東京堂

昭和二十四年八月廿五日 印刷
昭和二十四年九月廿五日 發行

鷗外選集 第八卷

定價二七〇圓

著者 森 林 太 郎

發行者 東京都千代田區神田神保町一ノ一七
大 橋 勇 夫

印刷者 京都市中京區壬生花井町三
鈴 木 直 樹



發行所 東 京 堂

振替東京二七〇番

(印刷 日本寫真印刷株式會社)

目次

澀江抽齋

栗山大膳

相原品

細木香以

解説（永井荷風）

一

三一

三四五

三六一

四〇七

澀江抽齋

その一

三十七年如一瞬。學醫傳業薄才伸。榮枯窮達任天命。安樂換錢不患貧。これは瀬江抽齋しよえ ちうさいの述志の詩である。想ふに天保十二年の暮に作つたものであらう。弘前の城主津輕順承つがるゆきつぐの定府の醫官で、當時近習詰になつてゐた。しかし隠居附にせられて、主に柳嶋にあつた信順の館へ出仕することになつてゐた。父允成たよしげが致仕して、家督相續をしてから十九年、母岩田氏縫を喪つてから十二年、父を失つてから四年になつてゐる。三度目の妻岡西氏徳と長男恒善つねよし、長女純いよ、二男優善やすよしとが家族で、五人暮しである。主人が三十七、妻が三十二、長男が十六、長女が十一、二男が七つである。邸は神田辨慶橋にあつた。知行は三百石である。しかし抽齋は心を潜めて古代の醫書を讀むことが好で、技を售うらうと云ふ念がないから、知行より外の收入は殆ど無かつただらう。只津輕家の秘方一粒金丹と云ふものを製して賣ることを許されてゐたので、若干の利益はあつた。

抽齋は自ら奉ずること極めて薄い人であつた。酒は全く飲まなかつたが、四年前に先代の藩

主信順に扈隨して弘前に往つて、翌年まで寒國にゐたので、晩酌をするやうになつた。煙草は終生喫まなかつた。遊山などもしない。時々採藥に小旅行をする位に過ぎない。只好劇家で劇場には屢出入したが、それも同好の人々と一しよに平土間を買つて行くことに極めてゐた。此連中を周茂叔連しうもしくせんと稱へたのは、廉を愛すると云ふ意味であつたさうである。

抽齋は金を何に費やしたか。恐らくは書を購ふと客を養ふとの二つの外に出でなかつただらう。澀江家は代々學醫であつたから、父祖の手澤を存じてゐる書籍が少くなかつただらうが、現に經籍訪古志に載つてゐる書目を見ても抽齋が書を買ふために貲しを惜まなかつたことは想ひ遣られる。

抽齋の家には食客が絶えなかつた。少いときは二三人、多いときは十餘人だつたさうである。大抵諸生の中で、志があり才があつて自ら給せざるものを選んで、寄食を許してゐたのだらう。抽齋は詩に貧を説いてゐる。其貧がどんな程度のものであつたかと云ふことは、略以上の事實から推測することが出来る。此詩を瞥見すれば、抽齋は其貧に安んじて、自家の材能さいのうを父祖傳來の醫業の上に施してゐたかと思はれよう。しかし私は抽齋の不平が二十八字の底に隠されてあるのを見ずにはゐられない。試みに看るが好い。一瞬の如くに過ぎ去つた四十年足らずの月日を顧みた第一の句は、第二の薄才伸を以て安おだやかに承けられる筈がない。伸ると云ふのは反

語でなくてはならない。老驥^{らうき}に伏すれども、志千里に在りと云ふ意が此中に藏せられてゐる。第三も亦同じ事である。作者は天命に任せるとは云つてゐるが、意を榮達に絶つてゐるのではなさうである。さて第四に至つて、作者は其貧を患へずに、安樂を得てゐると云つてゐる。これも反語であらうか。いや、さうではない。久しく修養を積んで、内に恃む所のある作者は、身を困苦の中に屈してゐて、志は未だ伸びないでもそこに安樂を得てゐたのであらう。

その二

抽齋は此詩を作つてから三年の後、弘化元年に躋^{せい}壽館^{じゅくわん}の講師になつた。躋壽館は明和二年に多紀^{たき}玉池^{ぎょくち}が佐久間町の天文臺址に立てた醫學校で、寛政三年に幕府の管轄に移されたものである。抽齋が講師になつた時には、もう玉池が死に、子藍溪、孫桂山、曾孫^{りうはん}柳^{りゅう}泔^{はん}も死に、玄孫曉湖の代になつてゐた。抽齋と親しかつた桂山の二男^{さいてい}蒞庭^{りてい}は、分家して館に勤めてゐたのである。今の制度と較べて見れば、抽齋は帝國大學醫科大學の教職に任ぜられたやうなものである。これと同時に抽齋は式目に登城することになり、次いで嘉永二年に將軍家慶に謁見して、所謂目見以上の身分になつた。これは抽齋の四十五歳の時で、其才が伸びたと云ふことは、此時に至つて始て言ふことが出来たであらう。しかし貧窮は舊に依つてゐたらしい。幕府からは嘉永三

年以後十五人扶持出ることになり、安政元年に又職務俸の如き性質の五人扶持が給せられ、年末ごとに賞銀五兩が渡されたが、新しい身分のために生ずる費用は、これを以て償ふことは出来なかつた。謁見の年には、當時の抽齋の妻山内氏五百が、衣類や裝飾品を賣つて費用に充てたさうである。五百は徳が亡くなつた後に抽齋の納れた四人目の妻である。

抽齋の述志の詩は、今わたくしが中村不折さんに書いて貰つて、居間に懸けてゐる。わたくしは此頃抽齋を敬慕する餘りに、此幅を作らせたのである。

抽齋は現に廣く世間に知られてゐる人物ではない。偶少數の人が知つてゐるのは、それは經籍訪古志の著者の一人として知つてゐるのである。多方面であつた抽齋には、本業の醫學に關するものを始として、哲學に關するもの、藝術に關するもの等、許多おもたの著述がある。しかし安政五年に抽齋が五十四歳で亡くなる迄に、脱稿しなかつたものもある。又既に成つた書も、當時は書籍を刊行すると云ふことが容易でなかつたので、世に公にせられなかつた。

抽齋の著した書で、存命中に印行せられたのは、只護痘要法ごとうほうほう一部のみである。これは種痘術のまだ廣く行はれなかつた當時、醫中の先覺者がこの恐るべき傳染病のために作つた數種の書の一つで、抽齋は術を池田京水に受けて記述したのである。これを除いては、こゝに數へ舉げるのも可笑しい程の四つの海と云ふ長唄の本があるに過ぎない。但しこれは當時作者が自家の

體面をいたはつて、最眞にしてゐる富士田千藏の名で公にしたのだが、今は憚るには及ぶまい。四つの海は今猶杵屋の一派では用ゐてゐる謡物の一つで、これも抽齋が多方面であつたと云ふことを證するに足る作である。

然らば世に多少知られてゐる經籍訪古志はどうであるか。これは抽齋の考證學の方面を代表すべき著述で、森枳園もりきと分擔して書いたものであるが、これを上梓することは出来なかつた。そのうち支那公使館にゐた楊守敬やうしゅけいが其寫本を手に入れ、それを姚子梁が公使徐承祖じょしょうそに見せたので、徐承祖が序文を書いて刊行させることになつた。其時幸に森がまだ生存してゐて、校正したのである。

世間に多少抽齋を知つてゐる人のあるのは、この支那人の手で刊行せられた經籍訪古志があるからである。しかしわたくしはこれに依つて抽齋を知つたのではない。

わたくしは少い時から多讀の癖があつて、随分多く書を買ふ。わたくしの俸錢ほうせんの大部分は内地の書肆と、ベルリン、パリの書估との手に入つてしまふ。しかしわたくしは曾て珍本を求めたことがない。或る時ドイツのバルテルスの文學史の序を讀むと、バルテルスが多く書を読まうとして、廉價の本を涉獵し、文學史に引用した諸家の書も、大抵レクラム版の書に過ぎないと言つてあつた。わたくしはこれを讀んで私かに殊域同嗜しゅよくどうしの人を獲たと思つた。それゆゑわ

たくしは漢籍に於ても宋槧本そうさくほんとか元槧本げんざんほんとか云ふものを顧みない。經籍訪古志は餘りわたくしの用に立たない。わたくしは其著者が澗江と森とであつたことをも忘れてゐたのである。

その三

わたくしの抽齋を知つたのは奇縁である。わたくしは醫者になつて大學を出た。そして官吏になつた。然るに少い時から文を作ることを好んでゐたので、いつの間にやら文士の列に加へられることになつた。其文章の題材を、種々の周圍の状況のために、過去に求めるやうになつてから、わたくしは徳川時代の事蹟を搜つた。そこに武鑑ぶかんを検する必要があるが生じた。

武鑑は、わたくしの見る所によれば、徳川史を窮むるに關くべからざる史料である。然るに公開せられてゐる圖書館では、年を逐つて發行せられた武鑑を集めてゐない。これは武鑑、殊に寛文頃より古い類書は、諸侯の事を記するに誤謬が多くて、信じ難いので、措いて顧みないのかも知れない。しかし武鑑の成立を考へて見れば、此誤謬の多いのは當然で、それは又他書によつて正すことが容易である。さて誤謬は誤謬として、記載の全體を觀察すれば、徳川時代の某年某月の現在人物等を斷面的に知るには、これに優る史料は無い。そこでわたくしは自ら武鑑を蒐集することに着手した。

此蒐集の間に、わたくしは弘前醫官澀江氏藏書記と云ふ朱印のある本に度々出逢つて、中には買ひ入れたものもある。わたくしはこれによつて弘前の官醫で澀江と云ふ人が、多く武鑑を藏してゐたと云ふことを、先づ知つた。

そのうち武鑑と云ふものは、いつから始まつて、最も古いもので現存してゐるのはいつの本かと云ふ問題が生じた。それを決するには、どれだけの種類の書を武鑑の中に數へるかと云ふ、武鑑のデフイニションを極めて掛からなくてはならない。

それにはわたくしは足利武鑑、織田武鑑、豊臣武鑑と云ふやうな、後の人のレコンストリユクシヨンによつて作られた書を最初に除く。次に群書類従にあるやうな分限帳の類を除く。さうすると跡に、時代の古いものでは、御馬印揃、御紋盡、御屋敷附の類が残つて、それが稍形を整へた江戸鑑となり、江戸鑑は直ちに後の所謂武鑑に接續するのである。

わたくしは現に蒐集中であるから、わたくしの武鑑に對する知識は日々變つて行く。しかし今知つてゐる限を言へば、馬印揃や紋盡は寛永中からあつたが、當時のものは今存じてゐない。その存じてゐるのは後に改板したものである。只一つこゝに姑く問題外として置きたいものがある。それは沼田頼輔さんが最古の武鑑として報告した、鎌田氏の治代ちたいふけんき普顯記中の記載である。沼田さんは西洋で特殊な史料として研究せられてゐるエラルヂツクを、我國に興さうとしてゐ

るものと見えて、紋章を研究してゐる。そして此目的を以て武鑑をあさるうちに、土佐の鎌田氏が寛永十一年の一万石以上の諸侯を記載したのを發見した。即ち治代普顯記の一節である。沼田さんは幸にわたくしに謄寫を許したから、わたくしは近いうちに此記載を精檢せいけんしようと思つてゐる。

そんなら今に迫いたるまでに、わたくしの見た最古の武鑑乃至其類書は何かと云ふと、それは正保二年に作つた江戸の屋敷附である。これは殆ど完全に保存せられた板本で、末に正保四年と刻してある。只題號を刻した紙が失はれたので、恣に命じた名が表紙に書いてある。此本が正保四年と刻してあつても、實は正保二年に作つたものだと言ふ證據は、卷中に數箇條あるが、試みに其一つを言へば、正保二年十二月二日に歿した細川三齋が三齋老として擧げてあつて、又其第やしまを諸邸宅のオリアンタシヨンのために引合に出してある事である。此本は東京帝國大學圖書館にある。

その四

わたくしはこの正保二年に出來て、四年に上梓せられた屋敷附より古い武鑑の類書を見たことが無い。降つて慶安中の紋盡になると、現に上野の帝國圖書館にも一冊ある。しかし可笑し

い事には、外題に慶安としてあるものは、後に寛文中に作つたもので、眞に慶安中に作つたものは、内容を改めずに、後の年號を附して印行したものである。それから明曆中の本になると、世間にちらほら残つてゐる。大學にある紋盡には、伴信友の自筆の序がある。伴は文政三年に此本を獲て、最古の武鑑として藏してゐたのださうである。それから寛文中の江戸鑑になると、世間に稍多い。

これはわたくしが數年間武鑑を搜索して得た斷案である。然るにわたくしに先んじて、夙く同じ斷案を得た人がある。それは上野の圖書館にある江戸鑑圖目錄と云ふ寫本を見て知ることが出来る。此書は古い武鑑類と江戸圖との目錄で、著者は自己の寓目した本と、買ひ得て藏してゐた本とを擧げてゐる。此書に正保二年の屋敷附を以て當時存じてゐた最古の武鑑類書だとして、卷首に載せてゐて、二年の二の字の傍に四と註してゐる。著者は四年と刻してある此書の内容が二年の事實だと云ふことにも心附いてゐたものと見える。著者はわたくしと同じやうな蒐集をして、同じ斷案を得てゐたと見える。序だから言ふが、わたくしは古い江戸圖をも集めてゐる。

然るに此目錄には著者の名が署して無い。只文中に所々考證を記すに當つて抽齋ちうさい云としてあるだけである。そしてわたくしの度々見た弘前醫官澠江氏藏書記の朱印が此寫本にもある。

わたくしはこれを見て、ふと瀝江氏と抽齋とが同人ではないかと思つた。そしてどうにかしてそれを確かめようと思ひ立つた。

わたくしは友人、就中東北地方から出た友人に逢ふ毎に、瀝江を知らぬか、抽齋を知らぬかと問うた。それから弘前の知人にも書狀を遣つて問ひ合せた。

或る日長井金風さんに會つて問ふと、長井さんが云つた。「弘前の瀝江なら藏書家で經籍訪古志を書いた人だ」と云つた。しかし抽齋と號してゐたかどうかは長井さんも知らなかつた。經籍訪古志には抽齋の號は載せてないからである。

そのうち弘前に勤めてゐる同僚の書狀が數通届いた。わたくしはそれによつてこれだけの事を知つた。瀝江氏は元祿の頃に津輕家に召し抱へられた醫者の家で、代々勤めてゐた。しかし定府であつたので、弘前には深く交つた人が少く、又瀝江氏の墓所も無ければ子孫も無い。今東京にゐる人で、瀝江氏と交つたかと思はれるのは、飯田巽いひだつみと云ふ人である。又郷土史家として瀝江氏の事蹟を知つてゐようかと思はれるのは、外崎覺とよさきかくと云ふ人であると云ふ事である。中にも外崎氏の名を指した人は、郷土の事に精しい佐藤彌六さんと云ふ老人で、當時大正四年に七十七歳になると云つてあつた。

わたくしは直接に瀝江氏と交つたらしいと云ふ飯田巽さんを、先づ訪ねようと思つて、唐突

ではあつたが、飯田さんの西江戸川町の邸へ往つた。飯田さんは素と宮内省の官吏で、今某會社の監査役をしてゐるのださうである。西江戸川町の大きい邸はすぐに知れた。わたくしは誰の紹介をも求めずに往つたのに、飯田さんは快く引見して、わたくしの間に答へた。飯田さんは澠江道純を識つてゐた。それは飯田さんの親戚に醫者があつて、其人が何か醫學上にむづかしい事があると、澠江に問ひに往くことになつてゐたからである。道純は本所御臺所町に住んでゐた。しかし子孫はどうなつたか知らぬと云ふのである。

その五

わたくしは飯田さんの口から始めて道純だうじゅんと云ふ名を聞いた。これは經籍訪古志の序に署してある名である。しかし道純が抽齋と號したかどうか飯田さんは知らなかつた。

切角道純を識つてゐた人に會つたのに、子孫のゐるかゐらないかもわからず、墓所を問ふたつきをも得ぬのを遺憾に思つて、わたくしは暇乞をしようとした。其時飯田さんが、「ちよいとお待下さい、念のために妻にきいて見ますから」と云つた。

細君が席に呼び入れられた。そして若し澠江道純の跡がどうなつてゐるか知らぬかと問はれて答へた。「道純さんの娘さんが本所松井町の杵屋勝久さんでございます。」

經籍訪古志の著者澀江道純の子が現存してゐると云ふことを、わたくしは此時始めて知つた。しかし杵屋と云へば長唄のお師匠さんであらう。それを本所に訪ねて、「お父うさんは抽齋と云ふ別號がありましたか」とか、「お父うさんは武鑑を集めてお出でしたか」とか云ふのは、餘りに唐突ではあるまいかと、わたくしは懸念した。

わたくしは杵屋さんに男の親戚がありはせぬか、問ひ合はせて貰ふことを飯田さんに頼んだ。飯田さんはそれをも快く諾した。わたくしは探索の一步を進めたのを喜んで、西江戸川町の邸を辭した。

二三日立つて飯田さんの手紙が來た。杵屋さんには澀江終吉と云ふ甥があつて、下澁谷に住んでゐると云ふのである。杵屋さんの甥と云へば、道純から見れば、孫でなくてはならない。さうして見れば、道純には娘があり孫があつて現存してゐるのである。

わたくしは直に終吉さんに手紙を出して、何時何處へ往つたら逢はれようかと問うた。返事は直に來た。今風邪で寝てゐるが、なほつたら此方から往つても好いと云ふのである。手跡はまだ少い人らしい。

わたくしは曠^{むな}しく終吉さんの病の癒えるのを待たなくてはならぬことになつた。探索はこゝに一頓挫を來さなくてはならない。わたくしはそれを遺憾に思つて、此隙に弘前から、歴史家